

# 微視的な言語変化 — be able to と be capable of の場合

山口和彦

札幌医科大学医療人育成センター 教養教育研究部門英語教室

Microscopic Language Change — Cases of *be able to* and *be capable of*

Kazuhiko Yamaguchi

English Division, Medical Education Center, Sapporo Medical University

言語は変化するということは周知の事実である。これまでは、言語変化と言った場合、100年ないしは数百年という長いスパンで捉えられてきたと思われる。しかし、1960年代と1990年代の日本語を比べて見れば分かるように。小さな変化は30年でも起こりうる。そこで、本稿の目的は、1) Brown (1960年代の米語) と Frown (1990年代の米語) という2つのコーパスを用い、30年間で *able to* と *capable of* の用法がどのように変化したかを記述すること。2) 同時に、この2つの形容詞がとる構文 (*be able to* と *be capable of*) の記述の精緻化をはかることである。結果として、*be able to* は1) 従来言われている *can* の代用表現と *could* との使い分けだけでなく、単独の用法も十分頻度的にあること、2) *doing* 形式や不定詞の用法も多岐に渡ることが分かった。これに反して、*be capable of* は1) 現在と過去で基本的に用いられ、あまり助動詞と共起しないこと。2) かなり抽象的な主語も容認すること。3) 非定形用法では、分詞構文と後置修飾しか生起例がないことが分かった。従来構文の変化と言えば、拡張という側面だけが注目を浴びてきた傾向があった。しかし、実際は30年間の変化としては、構文は拡張するばかりではなく、ある用法では縮小(頻度の減少)も同時に見られることが分かった。

## キーワード

言語変化 *be able to* *be capable of* 語法

## 1 はじめに

本稿の目的は、1) Brown (1960年代の米語) と Frown (1990年代の米語) という2つのコーパスを用い、30年間で *able to* と *capable of* の用法がどのように変化したかを記述すること。2) 同時に、この2つの形容詞がとる構文 (*be able to* と *be capable of*) の記述の精緻化をはかることである。

言語は変化するということは周知の事実である。その認識の反映として、文文化が現在この言語変化を扱う中心的なトピックとなっていると考えられる。代表的な入門書としては、Hopper and Thompson (2003)、論文集としては例えば、Traugott and Heine (1991)、Fischer et al (2004)、Traugott and Trousdale (2010) などがある。最近の研究をまとめたものとし

て、Narrog and Heine (2011) などがある。雑誌論文、博士論文、モノグラフなどを入れると膨大な数になる、相当の研究が蓄積されている分野である。ただ、これらの先行研究が念頭においている変化の期間は100年単位、ないしは、数百年ではないだろうか。

翻って考えてみると、言語は数十年単位でも変化しうる。日本語を見ても、1960年代の日本語(例えば、松本清張や井上靖)と現在(2010年代)の日本語(例えば、吉本ばななや村上春樹)は微妙に違う。こういった数十年単位の変化を(他に適切な用語がないので)微視的な言語変化と呼ぶことにする。この微視的な視点での言語変化を捉えようとした研究は、管見では意外なことにLeech et al (2009)しかない。これはBrownとFrownなどを比較して、30年の微視的な英語の変化を記述したものである。

本稿ではこの先行研究の精神に則り、Brown と Frown のコーパスを用いて、可能形式である be able to do と be capable of doing を調査対象とし、この2つの構文の微視的な言語変化を記述し、同時に Time 93 をサブコーパスとして用いながら、これらの構文の記述の精緻化をはかることにする。

本稿の構成は以下の通りである。2節で先行研究として11冊の英和・英英辞典の記述を取り上げる。3節で、be able to, be capable of のコーパスから判明した30年間の変化を示し、同時に記述を精緻化する。3.3節では、be able to と be capable of を比較する。4節はまとめである。

## 2 先行研究

はじめに述べたように、本稿で言う「微視的な言語変化」を扱った先行研究は、Leech et al (2009)しか管見ではないようである。結果として、この微視的な言語変化という視点で be able to と be capable of を扱った論文も著者の知る限りないようである。従って、本稿では、辞書ではどのように記述されているかを見ることで、これら構文の記述の問題点を浮き彫りにしていくことにする<sup>1</sup>。

先行研究として参照した英和辞典は、『スーパーアンカー英和辞典・第4版』(学習研究社) (SA4と省略)、『ウィズダム英和辞典・第3版』(三省堂) (Wi3と省略)、『ジーニアス英和辞典・第4版』(大修館書店) (G4と省略)、『ルミナス英和辞典・第3版』(研究社) (Lu3と省略)、『プログレッシブ英和辞典・第5版』(小学館) (Pr3と省略) である。なるべく多くの出版社から定評のあるものを使用した。

参照した英英辞典は、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* 8th. (OALD8と省略), *Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th (LDCE5と省略), *Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*. 3rd. (COBUILD3と省略), *Macmillan English Dictionary*

*for Advanced Learners*. 2nd. (MED2と省略), *Merriam-Webster's Advanced Learner's Dictionary*. (MELDと省略), *Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English*. (CCADAEと省略) である。英語系4種類、米語系2種類の計6種類で、いずれも定評のある外国人学習者用の英英辞典である。

### 2.1 be able to

本節では、be able to の先行記述をまとめ、問題点を指摘する。表1が11冊の辞書の記述をまとめたものである<sup>2</sup>。辞書の記述から浮かび上がる be able to の性質は以下の3点に要約される：1) 単独用法時の主語の性質。2) can の代用表現となる環境。3) その他(a) \*be able to be + 過去分詞について。b) be able to の比較級、原級の強めについて。c) be able to の be 以外のバリエーション。

第1に、単独用法時の主語の性質に関して考える。単独用法とは(1)や(2)のように、後述する can の代用としてではなく、be able to 自体が can とは微妙に異なる独自の可能の意味を表現する用法であるここでは定義しておく。この点について、英和は記述しているのが80%(4/5)<sup>3</sup>である。一方で、英英では MWLD でしか記述がなされていない。英和辞典の記述を見ると：SA4では「(人)が(…することが)できる」、Wi3では「(人・組織などが) (実際に)…することができ：(機械などが) …する性能を備えている」、G4では「通例Sは(人)であるが次のような例も可能：the rules.../ An elephant ...」、Pr3では「①ふつう人について用いる。②国家・社会・機械などが組織・操作するものも主語になる」と記述されている。英英辞典の MWLD が “a quality or condition of something makes something possible” という定義を与え、“car” が主語になった例文を上げている。これらの記述から分かるのは、be able to の主語は基本的に「人」であり(1)、拡張して人が操作するも

	SA4	Wi3	G4	Lu3	Pr3	OALD8	LDCE5	COBUILD3	MED2	MWLD	CCADAE
主語	訳	訳	○		○					○	
助+be able to		○		○		例文		例文			例文
未来形代用	○	○	○	○		○		例文	○	例文	○
完了形代用	○	○		○		○	例文		○		例文
V+to be able to		○				○	例文	例文	例文		
*able to be pp		○		○	○						
比較級	例文	例文	例文	○	○						
原級の強め			○	○							
バリエーション		例文	例文			例文	例文	例文			

表1

の(機械、組織、国家など)ということである(2)。

- (1) “But I don’t think he **is able to** accomplish anything because there is no money for him to do what is necessary.” (Time 930208)
- (2) “If you take away the profits that these companies **are able to** earn,” warns James Fenger, who watches pharmaceutical stocks for Kemper Financial Services in Chicago, “the incentive to do research will diminish, and our competitive position in the world will decline.” (Time 930308)

第2に、canの代用表現となる環境について考える。よく知られているように、(1)や(2)のような単独用法<sup>4</sup>以外に、be able toにはcanが生起できない環境で、canの代用をする用法がある。その環境は基本的に、助動詞の後ろ(3)、未来形の代用(4)、完了形の代用(5)、準動詞の代用(6)である。

- (3) “This is geopolitics, Rex. And what we have to do here is, we **have to be able to** go to the Hill and say, ‘Guys, we accept the imperatives in this.’” (Time 930712)
- (4) It is not a question of taking the prize away, but of ensuring that a government **won’t be able to** do again what the National Party did with absolute power, merely because it had a majority. (Time 930614)
- (5) With so many planes available owing to repossessions and canceled orders, fledgling airlines **have been able to** buy them at bargain-basement prices. (Time 930719)
- (6) Testifying before two congressional committees on the President’s health-care-reform plan, Shalala was chided for giving vague answers and for **not being able to** explain how the program would be financed. (Time 931018)

この点に関して一番情報が豊富なのは『ウィズダム英和辞典』で「助+be able to, have been able to, to be able to, being able toの場合で全体の7割を占め、残りが現在形・過去形」(p.5)と記述している。しかし、その他の辞書は意外にこの種の情報が乏しいことが表から分かる。助動詞+be able toに関しては、ウィズダムとルミナスのみの記述である(2/5)。未来形の代用に関しては、ほぼ記述がなされているもの

の(4/5)、その一方で、完了形の代用に関しては3冊、不定詞の代用に関しては1冊のみしか記述がなされていない。

一方、英英辞典での扱いをみると、この点に関しては、(7)のように2冊(OALD8とMED2)でしか取り上げられていない。また、例文で全てのパターンを示している辞書はOALD8以外ない。

- (7) a. You use *be able to* to form the future and perfect tenses and the infinitive: You’ll *be able to* get a taxi outside the station. ◇ I *haven’t been able to* get much work done today. ◇ She’d love *to be able to* play the piano. (OALD8)
- b. Forms such as *have been able to* and *will be able to* are sometimes considered as tenses of the verb *can* (MED2)

第3に、その他の3点について考える。まず、a)「\*be able to be + 過去分詞」について考える。これは、be able toの後には受身形が生じないという意味である。この点に関しては、例えば、(8)のように英和辞典では3冊が記述している。しかし、英英辞典では1冊もこの点に関して記述しているものはなかった。

- (8) \*This shirt is able to be washed without shrinking. (Pr3)

次に、b) be able toの比較級、原級の強めについて考える。be able toの比較級は、be better/more able toであると5つの英和辞典全てに記述、あるいは例文がある。一方、英英辞典でこの情報を与えているのは1冊もない。また、be able toを強める時は、be well able toであると記述・例文があるのが英和辞典では2冊ある。一方、ここでも英英辞典でこの情報を与えているのはない。コーパスを調べるとBrownには、be more able toが1例と「名詞 + better able to」(後置修飾用法)があるが、Frownには使用例がない。be well able toというパターンに至ってはどちらのコーパスにも出現していない。このように、比較級の説明・原級の強めについての辞書の記述は、英和辞典と英英辞典は非常な対照を見せている。

さらに、c) be able toのbe以外のバリエーションについて考える。ここで言うバリエーションとは、(9)のようにbe以外の動詞が生起する場合があることを指す。バリエーションが存在するということは、be

able to は完全に構文化しておらず、able がまだ形容詞の「感じ」を残していることを示していると思われる。英和辞典で、この点についてウィズダムとG4が例文を載せている(2/5)。一方、英英辞典では3冊が例文を載せている(3/6)。

(9) So far, Mrs. Clinton **has proved able to** juggle the demands of the new assignment and the traditional role. (Time 930208)

ここまできをまとめると、1) 単独用法の主語の性質に関しては、英和辞典では80%(4/5)が記述しているのに対し、英英辞典では1冊(13%)しか記述がなされていない。全体としては、45%(5/11)の記述割合である。2) can の代用となる環境に関しては、包括的な記述がなされているのは、英和辞典ではウィズダム、英英辞典ではOALD8のみであり、他の辞書は多かれ少なかれ記述が漏れている。3a) be able to の後には受身形が生じないということに関しては、英和辞典では、60%(3/5)が記述しているのに対し、英英辞典では1冊も記述がなされていない。全体としては、27%(3/11)の記述割合である。3b) be able to の比較級、原級の強めについては、英和辞典では全ての辞書に記述・例文がある。その一方で、英英辞典でこの主の情報を与えているのはない。3c) be able to のbe以外のバリエーションについては、英和辞典では2冊が記述しているのに対し(2/5)、英英辞典では3冊が記述している(3/6)。全体としては、45%(5/11)の記述割合である。

調べた辞書の全体的な問題点としては、1) can の代用となる環境に関して記述が不足している。2) be able to のbe以外のバリエーションについてあまり記述されていない。の2点が挙げられる。当然のことながら、本節の最初に挙げた辞書の記述から浮かび上がるbe able toの性質の全てを記述している辞書はなかった。英和辞典の問題点は、1) 多くの辞書がcouldとwas/were able toの使い分けにスペースを割きすぎて、canの代用表現となる環境をきちんと

記述していない。2) 調べたコーパスには殆ど出てこない頻度の低い比較級や原級の強めの情報が載せてあるということである。英英辞典の問題点は、1) 単独用法の主語の性質に関して、殆ど説明がない。2) canの代用となる環境の記述が6冊中2冊しかない。3) be able toの後には受身形が生じないことをどの辞書も指摘していない。の3点が挙げられる。

## 2.2 be capable of

本節では、be capable ofの先行記述をまとめ、問題点を指摘する。表2が11冊の辞書の記述をまとめたものである<sup>5)</sup>。辞書の記述から浮かび上がるbe capable ofの性質は以下の5点に要約される：1) 主語の性質。2) 例文の時制。3) 後置修飾用法の存在。4) 分詞構文が可能。5) be capable ofのbe以外のバリエーション。

第1に主語の性質に関して考える。英和辞典の記述を見ると：SA4は「(人・物が)A(行為)ができる」、Wi3は「(人・物などが)A(事)の[…する]能力がある」、G4は「(人・物が)〈事〉の[…する](潜在)能力がある」、Lu3は「(人が…の)能力[才能]がある、(物事などが…が)できる」、Pr3は「(人が)〈A〉の能力[才能、資質]がある、〈物が〉〈A〉ができる、の性質がある」と訳語の選択制限の形で説明されている。英和辞典はこのように全ての辞書が主語の性質について記述している。一方、英英辞典は唯一COBUILDが“If a person or thing is capable of doing something, they have the ability to do it”という定義中で説明している以外は記述がない。例文や英和辞典の記述から分かることは、be capable ofの主語は基本的にヒト(10)やモノ(11)であるということである。

(10) Saddam also may have been testing Clinton's mettle by warning that he, Saddam, **was capable of** stirring up trouble to divert the President-elect from his domestic agenda.

(Time 931205)

(11) If our ~ SAC bombers **were**, today, **capable**

	SA4	Wi3	G4	Lu3	Pr3	OALD8	LDCE5	COBUILD	MED2	MWLD	CCADAE
主語	訳	訳	訳	訳	訳			○			
例文の時制等	現在1	現在1	現在3	現在2	現在1	現在2	現在2	現在1	現在1	現在2	現在1
後置修飾					用例					用例	
分詞構文											
バリエーション								用例			用例

表2

of surviving a surprise missile attack and (because of infinite dispersion or long endurance had the capability to strike at Russia again, and again, and again), those bombers would unquestionably assure our military dominance. (Brown E)<sup>6</sup>

第2に例文の時制について考える。後で述べるように、(10)、(11)のように過去形もあれば、数は少ないものの助動詞の後ろ(12)に来る場合がある。しかし、なぜか調べた辞書は全て現在形の用例しかあげていない。

(12) The pullout intensified fears that North Korea **may now be capable of** producing nuclear weapons; South Korea and Japan expressed particular alarm. (Time 930322)

第3に(13)のような後置修飾用法について考える。後で述べるように、後置修飾は単純な形容詞用法(“some of the less *capable* people” (Frown D)よりも頻度が高い。しかし、英和辞典も英英辞典も1冊づつしか用例をあげていない。

(13) The U.N. forces are supposed to complete the disarming of Somalia’s warlord gangs and free-lance bandits and create a police force **capable of** maintaining law and order, two tasks the U.S.-led contingent barely began. (Time 930517)

第4に、(14)のような分詞構文について考える。後で述べるように、Brown や Frown では頻度はそれほど高くないが、Time93 では後置修飾と同じくらいの頻度で出てくる。しかし、調べた11冊の辞書で用例をあげているものはなかった。

(14) **Capable of** executing 650 million calculations per second, the M92 can simulate nuclear reactions to test designs, for example, speeding development of weapons. (Time 930201)

最後に、be capable of の be 以外のバリエーション以外について考える。この点に関して、英和辞典で用例をあげているものはなかった。また、英英辞典では2冊が用例を挙げていた。しかし面白いことに、(15)のような英英辞典のあげている appear capable of は3つのコーパスには見いだされなかった。

(15) He **appeared hardly capable of** conducting a coherent conversation... (COBUILD)

ここまでをまとめると、1) 主語の性質に関しては、英和辞典では全ての辞書が記述しているのに対し、英英辞典では1冊(13%)しか記述がなされていない。全体としては、55%(6/11)の記述割合である。2) 例文の時制に関しては、全ての辞書の用例が現在形だけである。3) 後置修飾用法に関しては、英和辞典も英英辞典も1冊づつしか用例をあげていない。4) 分詞構文に関しては、用例を挙げている辞書はなかった。5) be capable of の be 以外のバリエーションに関しては、英和辞典で用例を挙げているものはなかった。一方、英英辞典では2冊が用例を挙げていた。

調べた辞書の全体的な問題点としては、英和辞典も英英辞典も上に挙げた用法の全てをきちんと説明している辞書がないのが現状である。英和辞典の問題点は、主語の性質を訳語の中の選択制限で記述しているだけで、他の点に関しては何も説明がないことである。英英辞典の問題点は、主語についての記述が殆どなく、後は、例文を提示するだけであるということである。いずれにしても、基本的に大事な単語でありながら、辞書の記述においては等閑視されているようである。

### 3 結果と考察

本節では、Brown と Frown コーパスを主に使い、Time93 を補助コーパスとして使う事で、be able to と be capable of の記述の精緻化と30年間の変化を見る事にする。

様々なコーパスがある中で Brown と Frown を使う理由は、Brown コーパスが1960年代の米語をバランスよくサンプリングした100万語のコーパスであり、Frown コーパスが1990年代の米語を Brown コーパスの手法に則り、100万語のコーパスにしたものであるからである。バランスよくサンプリングされたコーパスでの頻度は基本的に言語の実態を反映していると考えられるからである (cf. 石川 2012)。また、両者とも米語のコーパスであり、2つのコーパスを比較する事で異なる時代の同じ米語という変種の微視的な変化を見る事ができるからである。

補助コーパスとして用いる Time93 とは、著者が自分で作成したコーパスで、アメリカの雑誌 *Time* 1993 年の1年分をコーパスにしたものである。*Time* はヨーロッパ版、アジア版などがあるが、ここでの Time93 はアメリカ版である。語数はおよそ180万語で、基本的に1990年代の Frown を補完する意味と洗練された英語を補助に利用する事で記述の精度を上げる意図がある。

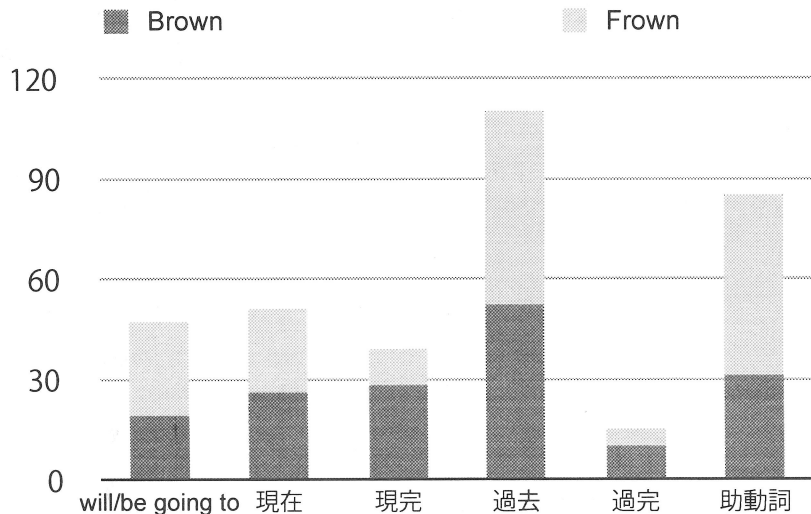


図 1

	will	be going to	現在	現完	過去	過完	助動詞	合計
Brown	18	1	26	28	52	10	31	166
Frown	27	1	25	11	58	5	54	181
Time93	75	4	30	27	44	4	81	265

表 3

### 3.1 be able to

本節では、be able to の記述と30年での微視的変化を見る事にする。最初に定型形式の記述と変化を、次に非定型形式の記述と変化を述べる。

#### ・ 定型形式の記述と変化

定型形式の記述では、1) be able toの3つの用法間 (can の代用表現、could と was/were able to の使い分け、現在形の単独用法) の頻度はどうなっているのか。2) can の代用表現中での頻度はどうなっているのか。3) be able to はどのような助動詞と共起するのか。の3点について考える。

はじめに、be able to の3つの用法間の頻度を考

える。Brown と Frown で、be able to がどのような時制(will と be going to は未来時制として数えた)や助動詞 (ここでは一括してある) と使われているかを図示したのが、図1である。それらのトークン数を表にしたのが、表3である。図表から分かるように、can の代用用法の使用率は53%(186/347)であり、could との使い分けの使用率は32% (110/347)であり、単独用法の使用率は、15%(51/347)である。補助コーパスの Time93 でも代用用法(72%)、could との使い分け(16%)、単独用法(11%)と同様の傾向を示す。従って、定型形式での be able to は、時制などの代用用法が一番頻度が高く、次に could との使い分け、最後に単独用法というのが基本的な頻度であると考えら

	have to	had to	must	need to	ought to	oughta	should	may	might	might have	would	would have	shall	be to	used to	
Brown	1	1	8	0	0	1	5	4	3	0	7	0	1	0	0	31
Frown	0	1	6	2	1	0	8	9	8	1	16	1	0	1	0	54
Time93	1	0	1	2	2	0	15	29	11	0	17	0	0	1	2	81

表 4

れる。

次に、代用用法の中での頻度はどうなっているのかを考える。図表から分かる通り、助動詞の後続用法は45%(84/185)、未来形(will と be going to)の代用は25%(47/185)、現在完了は21%(39/185)、過去完了は8%(15/185)である。補助コーパスの Time93 でも助動詞の後続用法は42%(81/191)、未来形(will と be going to)の代用は41%(79/191)、現在完了は14%(27/191)、過去完了は2%(4/191)と同様の傾向を示す。従って、定形形式での代用用法の中では、助動詞の後続用法が一番頻度が高く、次に未来形の代用、現在完了の代用、過去完了の代用という頻度順になる。

最後に、どのような助動詞と共起するかを考える。表4はどのような助動詞と共起するかと、共起数を示したものである。表から比較的多くの種類の助動詞と共起していることが分かる。特に、義務系(have to/had to, must, need to, ought to, should)の法助動詞と推量系(may/might, would)の法助動詞との共起例が多い。

続いて、60年代から90年代にかけての3つの変化を見る：1) 時制や助動詞の後続用法の使用頻度の変化。2) be able to と共起する義務系の助動詞の頻度の減少と推量系の助動詞の頻度の増加。3) be able to と共起する助動詞の多様化。

まず、時制や助動詞の後続用法の使用頻度の変化を考える。Brown での使用頻度は「過去(31%)>助動詞・現在完了(19%)>現在(16%)>未来(11%)>過去完了(6%)」の順で過去が一番多い。Frown での使用頻度は「過去(32%)・助動詞(30%)>未来(15%)・現在(14%)>現在完了(6%)・過去完了(3%)」の順である。ここから読み取れる30年の変化としては、助動詞の後続用法と未来形代用用法が増加し、完了系(現在完了形と過去完了形)の代用用法の使用頻度が減少していることである。

次に、be able to と共起する義務系の助動詞の頻度の減少と推量系の助動詞の頻度の増加について考える。Brown での義務系と推量系の助動詞との共起数は、義務系52%(16/31)対推量系45%(14/31)である。これに対して、Frown での義務系と推量系の助動詞との共起数は、義務系33%(18/54)対推量系65%(35/54)である。ここから、義務系は52%から33%に減少し、推量系は45%から65%へ増加したことが分かる。つまり、30年間で義務系の助動詞の頻度が減少し、推量系の助動詞の頻度が増加したと考えられる。

最後に、be able to と共起する助動詞の多様化について考える。Frown では、Brown には現れない need to (cf. (16))と ought to (cf. (17))が現れてい

る。これは補助コーパスの Time93 でも同様な傾向を示す。また、Time93 のみに、be to (cf. (18))と used to (cf. (19))の生起例が観察される。生起数は少ないが、共起する助動詞の種類が増加していると言えるのではないだろうか。

- (16) Don't you remember? Mom was saying how safe they were, that we **didn't need to be able to** go any faster. (Frown P)
- (17) We **ought to be able to** find somebody who saw something out of place - anything odd. (Frown L)
- (18) But I needed a much clearer sense of where Ronald Reagan stood if I **was to be able to** move us from rhetoric to real engagement. (Time 930510)
- (19) "We **used to be able to** grow cereal crops here, corn and rice," says Rene Coty, the local schoolteacher. (Time 930705)

これらの変化が意味することは少なくとも3点あると思われる。1点目は、話者の気持ちを表す傾向が強くなったと考えられることである。それを支持するのは、100万語当りの助動詞の使用率が30年で58%増加しているという事実である(Brown では31トークン、Frown では54トークン)。法助動詞は基本的に話者の態度や気持ちを表すものである。従って、助動詞使用の増加は話者の気持ちを表す傾向が強くなったと考えられる。これは義務系の助動詞の使用が減少し、推量系(話者の憶測)の助動詞が増加したことからも支持されるだろう。そして、助動詞の使用率が増加すれば、当然、助動詞の後続用法が増加する。2点目は、推量系の助動詞使用率の増加は、断定を避ける傾向も強くなったとためと考えられる。これは、現在形の使用率が16%から14%へと若干減少していることから支持されると思われる。断定を避けるから推量系の助動詞使用率が増加したのである。3点目は、完了系の代用用法の減少は、複雑な時制形式を避ける傾向を示すと考えられる。この3点を合わせて考えれば、複雑な形式や断定を避け、話者の気持ち・推量を表す傾向が30年で強くなったと考えられる。

さらに抽象化を一步進めれば、この変化は、1) 形式的には単純化したか、法助動詞の使用率増加と助動詞の多様化で意味的には複雑化した。2) 使用頻度が増加した代用用法(未来形など)がある一方で、使用頻度が減少した代用用法(完了系)がある。3) 使用頻度が増加した助動詞(推量系)がある一方で、使用頻度が減少した助動詞(義務系)がある。これらが示すことは、

言語における変化は一方向（例えば、増加のみなど）ではなく、単純化と複雑化あるいは、増加と減少というように相反する傾向が同時に存在しながら変化していくということではないだろうか。

ここまですべてをまとめると、

・定型形式でのbe able toは、1) can の代用用法が一番頻度が高く、次にcould との使い分け、最後に単独用法というのが基本的な頻度である。2) 代用用法の頻度は、助動詞の後続用法が一番頻度が高く、次に未来形の代用方法、続いて、現在完了の代用、過去完了の代用と言う頻度順になる。3) 義務系(must, shouldなど)の法助動詞と推量系(may/might, wouldなど)の法助動詞との共起例が多い。

・30年間の変化としては、1) 助動詞の後続用法と未来形代用用法が増加し、現在完了形と過去完了形の代用用法の使用頻度が減少した。2) 義務系の助動詞の頻度が減少し、推量系の助動詞の頻度が増加した。3) 共起する助動詞の種類が増加した。

#### ・非定形形式の記述と変化

本節では、非定形形式がどのように使われているかを見る。be able to が取りうる非定形形式はdoing形とto不定詞である。コーパスでのdoing形の生起パターンは、前置詞の目的語と動詞の補部の2種類であり、to不定詞の生起パターンは、述語の補部、名詞的用法、副詞的用法の3種類である。これらを順に見ていくことにする。

初めにdoing形を見る。Brownでは、doing形は前置詞の目的語(20)と動詞の補部(21)として合計7つ使用例がある。前置詞は(20)のon以外は、in, of, instead ofなどが見られる。前置詞の目的語の動詞の補部に関しては、(21)のregret以外はimagineとaccount forであり、特に後者は(22)のように非常にformalな英語である。

(20) As we know, the Soviet peasant today still very largely thrives **on being able to** sell the produce grown on his private plot;

(Brown B)

(21) Madden **regretted not being able to** find fault with so true a statement. (Brown L)

(22) Again, I at first misconstrued this disconcertingly intense communication, and I quickly cast through my mind to account **for her being able to** speak, with such utter conviction, of an opinion held by my father, now several years deceased. (Brown J)

これに対してFrownでも、Brownと同様に前置詞の目的語(23)と動詞の補部(24)として合計6つの使用例がある。前置詞は他にfor, by, to等がある。動詞の補部は(24)のloveのみである。両者ともBrownと共通するものがないが、これはサンプル数が少ないので、傾向かどうかは不明である。ただ、(25)のように非常にformalな英語も健在ではある。両コーパスを合わせてまとめれば、生起例がある「前置詞+being able to」の前置詞は、on, in, of, instead of, without, for, by, toであり、これと言った傾向は見いだせない。be able toを補部として取る動詞は、regret, imagine, account for, loveであり、これもこれと言った傾向が見いだせない。また、どちらも頻度としては低いせいか、用例として記載している辞書は殆どない。

(23) “We are tired of seeing these people coming in after killing other people, **without being able to do** anything about it,” Fantus said.

(Frown A)

(24) And **I loved being able to** have my daughter share that with me. (Frown E)

(25) “Waters insists, but “if it thwarts the process or throws up obstacles **to your being able to** represent your district, I’m notgoing to go along with it.” (Frown F)

次にto不定詞を見ることにする。述語の補部となるto不定詞は、Brownでは、(26)以外には、hope, want, seem, be likely toである。Frownでも(27)以外はhope, want somebody to, would, like to, seemのように類似した述語が使われている。基本的に、希望や願望動詞と様態判断の述語とbe able toは結びつきやすいと言えるのではないだろうか。

(26) Barnett **is not expected to be able to** withstand the pressure. (Brown A)

(27) ...: the story of the rich farmer who foolishly **expects to be able to live to** store and enjoy his wealth. (Frown D)

to不定詞の名詞的用法は、(28), (29)のような仮主語はBrownでもFrownでも見られる。コーパスで見られた述語は、Brownでは他にgood, nice, characteristic, it makes N easy toであり、Frownでは、他にa sign of genius, important, gratifyingである。どちらのコーパスでも基本的にbe able toは肯定的な(positive)述語と結びつきやすいと言える



のではないだろうか。

(28) There was a time when, if a man wanted to purchase a boat, it was **necessary for him to be able to** produce a sizeable amount of cash before he could touch the tiller or wheel. (Brown E)

(29) "It's **nice to be able to** go to rushes of a picture or a rough cut and be very thrilled with what you're seeing." (Frown A)

to 不定詞の副詞的用法は、目的を表す用例が Brown(30)と Frown(31)に共に見られる。

(30) **In order to be able to** properly relate the data for a single company each of the three cards comprising the set for each firm was identified with the appropriate serial number of the respondent. (Brown J)

(31) I come from a small family. I studied; worked in the evening **in order to be able to** go on studying. (Frown P)

ここまでをまとめると、doing 形式では前置詞の目的語と動詞の補部の使用例が見られる。to 不定詞に関しては、述語の補部、仮主語の名詞的用法、in order to を用いた副詞的用法が見られる。不思議なことに、「動詞+to be able to」以外は、辞書に用例として殆ど記載されていない。

続いて、60年代から90年代にかけての変化を見る：1) to 不定詞の名詞的用法の拡張。2) 分詞構文の拡張。3) to 不定詞の副詞的用法の減少。4) be able to の be 動詞以外のバリエーションの減少。4) 「名詞+able to」構文の出現。5) 「able+名詞」の減少。

第1に、60年代から90年代にかけての変化を見る。最初は to 不定詞の名詞的用法の拡張<sup>7</sup>である。Brown には出現していなかったが、Frown には be 動詞の補語になる用例(32)が見いだされる。補助コーパスのTime93に同じ用法が見られるので、これは30年経過して用法が拡張されたと考えられる。

(32) That the point of having a car at all is just **to be able to** get from one place to another. (Frown P)

第2に、分詞構文の拡張である。Brown では(33)の後置型1例のみである。一方、Frown では7例あ

り、後置型はもちろん、(34)のような前置型も見られる。補助コーパスのTime93には、(35)の with 型の分詞構文を含めて4例が見いだされる。用例数が少ないが、be able to は30年で(33)のような後置型のみから、前置型や with N able to 構文へと拡張されたと考えられる。

(33) It does", Shayne grunted sourly, **still able to** taste her mouth on his in the Green Jungle parking lot. (Brown L)

(34) Bedridden with pain, **barely able to** breathe, Miss X had little to look forward to beyond her six daily grains of morphine. (Frown F)

(35) **With** South Africa **able to** play an important role, this is no longer the lost continent. (Time 930920)

第3に、to 不定詞の副詞的用法の減少(単純化)を考える。Brown においては、(30)以外にも enough to, too...to などの用例や(36)のように非常に固い表現が見られる。これに対して、Frown では(31)にあげた in order to の1例しか生起例がない。これは先に述べた複雑な形式を避ける傾向の1つなのかもしれない。

(36) "I can imagine!" Susan was an active character; **for Mother to be able to** call, Susan must be napping now, surrounded by her multitude of dolls. (Brown P)

第4に、be able to の be 動詞以外のバリエーションの減少について考える。Brown では、feel able to, find oneself able to, seem able to などのバリエーションが見られる(cf. (37), (38), (39))。しかし、Frown では seem able to の3例のみとなっている。(用例数が少ないのに目をつぶれば) be 動詞以外のバリエーションがここ30年で減少していると言えるだろう。

(37) He **felt able to** end on a note of hope. (Brown B)

(38) She **found herself able to** sing any role and any song which struck her fancy. (Brown M)

(39) Some are failing to achieve as much as their ability would permit; others never **seem able to** enter fully into the life of the classroom. (Brown J)

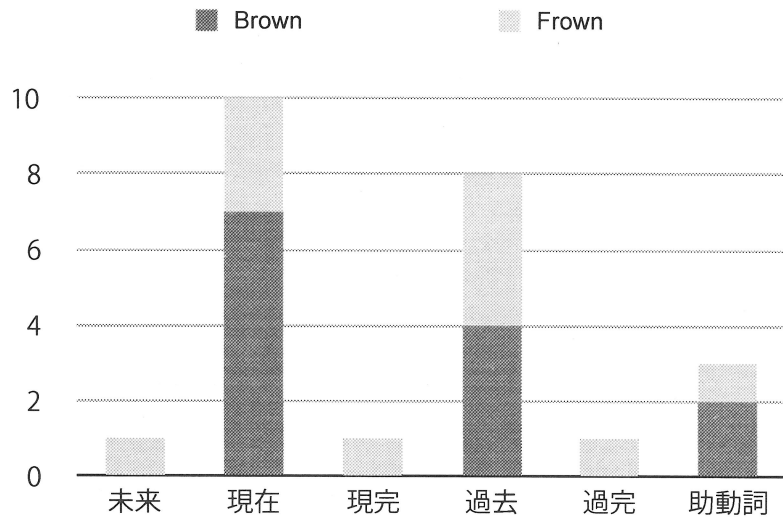


図 2

	will	現在	現完	過去	過完	助動詞	合計
Brown	0	7	0	4	0	2	13
Frown	1	3	1	4	1	1	11
Time93	0	7	0	3	0	2	12

表 5

第5に、(40)のような「名詞 able to」構文（形容詞の後置修飾用法）の出現について考える。この構文は、Brownでは生起例がないが、Frownでは3例見られる。Time93でも5例見られるので、30年で構文が拡張したと考えられる。

(40) Perhaps both motives were at work, a youthful author's passionate quest for originality tempered by conscientious self-disclosure and a willingness to reveal his philosophical legerdemain to those **able to** appreciate it. (Frown J)

最後に、「able+名詞」の減少について考える。辞書では、be able to と並んで、名詞修飾用法の able に同意語との違いなどのスペースを割いている。しかし、Brown では14例見られた「able+名詞」が、Frown では7例へと減少している。Time93でも4例しかないので、使用例が減少した考えても差し支えないように思われる。これは、able が形容詞ではなく、be able to という1つのパターンとして固定しつつあることの現れではないだろうか。

これらの非定型形式の変化は、先に見た定形形式の

変化と同じ方向性を示しているように思われる。すなわち、ここでも拡張した用法・構文（to不定詞の名詞的用法、分詞構文、「名詞+able to」構文）がある一方で、減少・縮小した構文（to不定詞の副詞的用法、be able to の be 動詞以外のバリエーション、「able+名詞」）が存在する。つまり、変化は一方向のみではなく、相反する傾向が同時存在しながら進行していくということである。

ここまできると、

・非定形形式の be able to は、1) doing 形式は、前置詞の目的語と動詞の補部の使用例が見られる。2) to不定詞に関しては、述語の補部、仮主語の名詞的用法、in order to を用いた副詞的用法が見られる。

・30年間の変化としては、1) to不定詞の名詞用法で、be 動詞の補語になる用法が拡張された。2) 分詞構文の使用頻度が増加し、with N able to do という構文も出現した。3) to不定詞の副詞的用法が減少し、単純化した。4) be able to の be 動詞以外のバリエーションが減少した。5) 「名詞+able to」構文が出現した。6) 「able+名詞」が減少した。

微視的な言語変化 — be able toとbe capable ofの場合

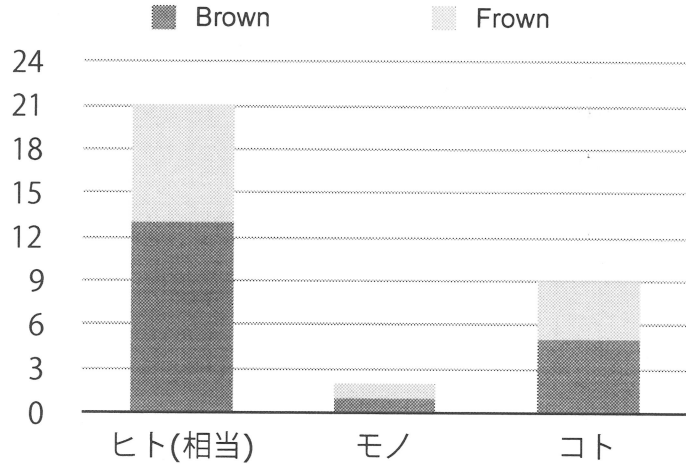


図3

	ヒト(相当)	モノ	コト	合計
Brown	13	1	5	19
Frown	8	1	4	13

表6

3.2 be capable of

本節では、be capable ofの記述と30年での微視的变化を見る事にする。最初に定型形式の記述と変化を、次に非定型形式の記述と変化を述べる。

・定型形式の記述と変化

定型形式の記述では、1) be capable ofが共起する時制の頻度。2) be capable ofはどのような助動詞と共起するのか。3) 主語の性質。の3点について考える。

初めに、be capable ofが共起する時制の頻度を考える。BrownとFrownで、be capable ofがどのような時制(willは未来時制として数えた)や助動詞(ここでは一括してある)と使われているかを図示したのが、図2である。それらのトークン数を表にしたのが、表5である。図表から分かるように各時制・助動詞の使用率は、現在42%(10/24)、過去33%(8/24)、助動詞13%(3/24)、未来・現完・過完各4%(1/24)である。圧倒的に現在形と過去形が多い(両者を合わせると75%)。ここから分かることは、be capable ofは基本的に現在形と過去形で用いられるということである。

次に、どのような助動詞と共起するのかについて考える。Brownでは、2例ともmustと共起している(41)。Frownでは、will have toとの共起が1例のみ(42)。Time93では、2例ともmayと共起している(43)。用例数が少ないので確たることは言えないが、

ここでもbe able toと同様に、義務と推量の助動詞と共起していると言えないだろうか。この共起する助動詞が少ないことを別な側面から考えれば、be able toと違い、同じ可能形式でありながら、be capable ofはあまり助動詞とは共起しないと言える。このことから、be capable ofは話者の気持ちや態度を表す法助動詞とはあまり相容れない、基本的に事実指向の強い述語であると言えるだろう。

- (41) He **must be capable of** designing for and supervising the manufacture E29 0540 of any craft materials needed in the furnishings  
(Brown E)
- (42) It follows that any 'male spectator' that I discuss here **will have to be capable of** dealing with conflicting cultural messages, with contradictory subject positions within 'masculinity,' and with competitive cultural interpellations.  
(Frown G)
- (43) Psychiatry **may be capable of** explaining such behavior, and perhaps the security of office will calm Clinton down.(Time 931205)

最後に、主語の性質を考える。先行研究で述べた辞書の記述では、基本的にヒトとモノが指摘されてきた。コーパスの結果は図3(表6)である。表中のヒト(相

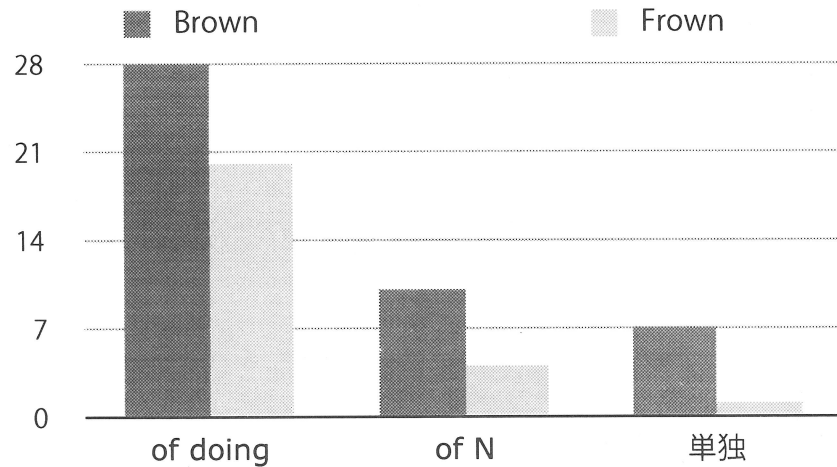


図 4

	of doing	of N	单独	合計
Brown	28	10	7	45
Frown	20	4	1	25

表 7

当)とは、“our military forces”や“the platoons”のようにヒト自身を指す訳ではないが、ヒトと見なしても差し支えないものを言う。表から分かるように、先行研究で言われているモノはかなり生起例が少なく、逆にどの辞書も指摘してないコトが案外多いことが分かる。コトの具体例としては、“proper ritual observance”, “a certain kind of detached understanding”などがある。これから分かるようにかなり抽象的な主語も容認するのがbe capable ofの特徴の一つであり、be able toとは大きく異なるところである。

さらに、60年代から90年代にかけての変化は使用される時制が多様化したことの1点のみである。つまり、使用される時制は、Brownでは現在と過去のみであった。これに対して、Frownでは現在と過去以外に、未来・現在完了・過去完了と多様性が増加した。

#### ・非定形形式の記述と変化

本節では、非定型形式がどのように使われているのかを見る。be capable ofの非定形形式で出現例があったのは、Brownでは、(44)の分詞構文3例、(45)の「接続詞+capable of」1例、(46)の後置修飾6例の3種類である。Frownでは、分詞構文1例と後置修飾6例である。結局、非定形形式は、分詞構文、後置修飾、「接続詞+capable of」の3パターンあることになる。しかし、分詞構文にしても後置修飾にしても、

capable Nという単純な形容詞用法より生起例が多いのにも関わらず、記述ないしは例文を上げている辞書が殆どない。

- (44) From this action sprang the idea of somehow uniting Greek and Shakespearean drama into a new total form, **capable of** restoring to life the ancient moral and poetic responses. (Brown G)
- (45) **Though** versatile and **capable of** turning out a ballad lyric with the best of them, Mercer's forte is a highly polished quasi-folk wit. (Brown G)
- (46) All such imitations of negative quality have given rise to a compensatory response in the form of a heroic and highly individualistic humanism: if man can neither know nor love reality as it is, he can at least invent an artistic “reality” which is its own world and which can speak to man of purely personal and subjective qualities **capable of** being known and worthy of being loved. (Brown G)

次に60年代から90年代にかけての変化を見てみる。変化があったのは、be capable of doing, be

## 微視的な言語変化 — be able toとbe capable ofの場合

	時制	助動詞
be able to	様々	10種類以上
be capable of	主に現在と過去	殆ど共起しない

表 8

	be able to	be capable of
Brown	11% (23/202)	16% (3/19)
Frown	18% (29/160)	16% (2/13)

表 9

	able N	capable N
Brown	14	7
Frown	7	1

表10

capable of N, capable N の頻度である。主に英和辞典で be capable of にはこの3つの用法があると記述されている。これらのデータが図4(表7)である。Brown も Frown も、表面的な頻度順としては「be capable of doing > be capable of N > capable N」と変わらない。詳しく見てみると、60年代(Brown)では、be capable of doing は62%(28/45)、be capable of N は22%(10/45)、capable N は16%(7/45)とそれなりの頻度で使用されていた。これが90年代(Frown)になると、be capable of doing は80%(20/25)と使用例の殆どを占めるようになり、be capable of N は22%(10/45)から16%(4/25)へと減少し、単独用法(capable N)に至っては15%(7/45)から4%(1/25)へと減少している。4%と言ってもわずか1例である。つまり、この30年で、be capable of doing の使用頻度が上昇し、be capable of N と capable N の使用頻度が減少した。

ここまできをまとめると、

・定型形式の be capable of は、1) 現在と過去で基本的に用いられる。2) 義務と推量の助動詞と共起する傾向が強いが頻度が非常に低い。3) be able to と違い、かなり抽象的な主語も容認する。4) 非定形用法では、分詞構文と後置修飾用法(N capable of doing)しか使用例がない。

・30年間の変化としては、be capable of doing の使用頻度が上昇し、be capable of N と capable N の使用頻度が減少した。

### 3.3 be able toとbe capable ofの比較

前節を多少繰り返すことになるが、本節では be able to と be capable of の3つのコーパスから浮かび上がる類似点と相違点を考えてみたい。1) 時制形式、2) doing/to do 形式の用法、3) 分詞構文と後置修飾、4) 否定文、5) 単純用法の5点である。

時制形式に関しては、be able to は can の代用という側面があるので、様々な時制をとり、種々雑多な助動詞とも結びつく。一方で、be capable of は基本的に現在・過去時制でしか用いられず、助動詞とも殆ど結びつかない。これらをまとめたのが表8である。

doing/to do などの準動詞に関しては、be able to はやはり can の代用という側面があるため、動詞の補語、仮主語などの名詞用法、副詞的用法などの様々な用法が見られる。一方で、be capable of は、コーパスでは、be able to に見られた用法はどれも見られなかった。

分詞構文と後置修飾に関しては、これまでの説明とは逆のパターンが見られる。すなわち、be able to は60年代においては、分詞構文1例、後置修飾の生起例なしから、90年代にかけて用例数が増加し、構文が拡

張したことが伺われる。一方、be capable of はどちらも60年代から見られ、拡張したとは考えづらい。

否定文に関しては、be able to と be capable of で同様な傾向が見られる。表9に見られるように、どちらの形式もいずれのコーパスにおいても否定文の使用率は20%を超えずほぼ一定の値である。これは、もちろん be unable to と be incapable of という専用の形式が存在するというのも理由と考えられるが、それよりもむしろ、able や capable は能力の肯定的な側面を述べるものであり、その事実を述べるのがこれら両形式の機能だからではないからだろうか。

最後に単純用法であるが、表10にあるように、どちらも30年間で使用例が減少している。これは両方とも be able to, be capable of という構文化してきている傾向として捉えられるのではないだろうか。

まとめると、1) 時制形式では、be able to は様々な形式を見せる一方で、be capable of は基本的に現在・過去形しか用例がない。2) doing/to do 形式の用法では、be able to は多様な用法が見られる一方で、be capable of は対応する用法がどれも使用例としてコーパスには現れない。3) 分詞構文と後置修飾では、be able to が30年間で用法を拡張してきた考えられる一方で、be capable of は60年代から両方の用法があった。4) 否定文では、両形式とも30年を通して使用率は20%以下で大きな変化は感じられない。5) 単純用法は、able と capable とともに30年間で大幅に減少し、be able to と be capable of が可能形式として構文化している最中であると考えられる。

#### 4 まとめ

本稿では、1) Brown と Frown の2つのコーパスを用い、30年間で able と capable の用法がどのように変化したかを記述した。2) 同時に、この2つの構文の記述の精緻化をはかった。その結果、記述の精緻化として：

- **be able to** は、1) can の代用用法が一番頻度が高く、次に could との使い分け、最後に単独用法というのが基本的な頻度である。2) 代用用法の頻度は、助動詞の後続用法が一番頻度が高く、次に未来時制の代用方法、続いて、現在完了の代用、過去完了の代用と言う頻度順になる。3) 義務系 (must, should など) の法助動詞と推量系 (may/might, would など) の法助動詞との共起例が多い。4) doing 形式では、前置詞の目的語、動詞の補部の使用例が見られる。5) to 不定詞では、述語の補部、仮主語の名詞的用法、in order to を用いた副詞的用法が見られる。6) with N able to 構文や N able to 構文が存在する。

- **be capable of** は、1) 現在と過去で基本的に用いられる。2) 義務と推量の助動詞と共起する傾向が強いが頻度が非常に低い。3) be able to と違い、かなり抽象的な主語も容認する。4) 非定形用法では、分詞構文と後置修飾用法 (N capable of doing) しか使用例がない。

30年間の変化として：

- **be able to** は、1) 助動詞の後続用法と未来形代用用法が増加し、現在完了形と過去完了形の代用用法の使用頻度が減少した。2) 義務系の助動詞の頻度が減少し、推量系の助動詞の使用頻度が増加した。3) 共起する助動詞の種類が増加した。4) to 不定詞の名詞用法で、be 動詞の補語になる用法が拡張された。5) 分詞構文の使用頻度が増加し、with N able to do という構文も出現した。6) to 不定詞の副詞的用法が減少し、単純化した。7) be able to の be 動詞以外のバリエーションが減少した。8) 「名詞+able to」構文が出現した。9) 「able+名詞」が減少した。
- **be capable of** は、be capable of doing の使用頻度が上昇し、be capable of N と capable N の使用頻度が減少した。

ということが分かった。他の可能形式の30年間の変化、米語ではなく英語の30年間の変化はどうかと言った問題は他日を期したい<sup>8</sup>。

#### 注

- \* 貴重な意見を下さった2人の査読委員に感謝いたします。
- <sup>1</sup> 2つのコーパスを比較した語法研究では、田島 (1995) がある。これは Brown と LOB (Brownコーパスのイギリス英語版) を比較し、そこに史的観点を導入して語法の説明をしたものである。また、Aarts et al (2013) は Leech (2009) の方向性で微視的な英語の変化を捉えようとした論文集である。
- <sup>2</sup> ○印は何らかの方法で辞書にその記述があることを示す。「訳」は be able to の訳語の中に選択制限の情報として示されていることを意味する。「例文」は該当箇所の記述はないが、その情報が例文で示されていることを意味する。
- <sup>3</sup> この (4/5) などは「情報を記載している辞書数/総辞書数(英和なら5、英英なら6)」を表す。
- <sup>4</sup> ちなみに、Time93 に現在進行形の単独用法の使用例がある。もちろん、どの辞書にも記述されていない。  
(i) “A big part of the job,” says Begala, “**is being able to** take dictation. I always remember I’m the monkey and he’s the organ-grinder.”

- <sup>5</sup> 「現在1」とは、現在形の用例が1例という意味で、全用例数を示すものではない。
- <sup>6</sup> Brown D などの末尾のアルファベットの大きい文字は、コーパス内のジャンルを示す。すなわち、A: Reportage, B: Editorial, C: Review, D: Religion, E: Skills, trades and hobbies, F: Popular lore, G: Belles lettres, biographies, essays, H: Miscellaneous, J: Science, K: General fiction, L: Mystery and detective Fiction, M: Science fiction, N: Adventure and Western, P: Romance and love story, R: Humor であり、Frown も同じである。
- <sup>7</sup> コーパスでは、ある構文が「ある」ことは示せても、「ない・なかった」ことは示せない。従って、厳密に言えば「拡張・出現」は、ある構文が100万語のコーパスに出現する程、頻度が高くなったという意味である。
- <sup>8</sup> 本稿を脱稿後、Hundt and Leech (2012) ““Small is beautiful” on the value of standard reference corpora for observing recent grammatical change.” in Nevalainen, T and E. T. Traugott (eds.) *The Oxford Handbook of the History of English*. Oxford University Press. pp. 175-188を読むことができた。それによれば、本稿で行った「微視的な言語変化」の研究は“mid-1990” (Hundt and Leech 2012: 175)に始まったようである。

### 参考文献

- Aarts, Bas, Joanne Close, Geoffrey Leech, and Sean Wallis. 2013. *The Verb Phrase in English: Investigating Recent Language Change with Corpora*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English*. 2006. London: Cengage Learning.
- Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*. 3rd. 2001. London: Harpercollins.
- Fischer, Olga, Muriel Norde, and Harry Perridon. 2004. *Up and Down the Cline: The Nature of Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, P and E. Traugott. 2003. *Grammaticalization*, 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair, and Nicholas Smith. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th. 2009. London: Pearson Longman.
- Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*. 2nd. 2007. London: Macmillan.
- Merriam-Webster's Advanced Learner's Dictionary*. 2008. New York: Merriam Webster.
- Narrog, Heiko and Bernd Heine. 2011. *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* 8th. 2010. Oxford: Oxford University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine. 1991. *Approaches to Grammaticalization. vol. 1 & 2*. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale. 2010. *Gradience, Gradualness and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins.

- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』東京：ひつじ書房.
- 井上 永幸、赤野 一郎. 2012. 『ウィズダム英和辞典・第3版』東京：三省堂.
- 小西 友七、南出 康世. 2006. 『ジーニアス英和辞典・第4版』東京：大修館書店.
- 瀬戸 賢一、投野 由紀夫. 2012. 『プログレッシブ英和辞典・第5版』東京：小学館.
- 竹林 滋、小島 義郎、東 信行、赤須 薫. 2005. 『ルミナス英和辞典・第3版』東京：研究社.
- 田島松二 (編). 1995. 『コンピューター・コーパス利用による現代英米語法研究』東京：開文社出版.
- 山岸勝榮. 2009. 『スーパー・アンカー英和辞典 第4版』東京：学習研究社.

